様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｈ０３７２２

研究課題名（和文）伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary research on the modern history of Ise Shrine tourism

研究代表者
平山　昇（HIRAYAMA, Noboru）

神奈川大学・国際日本学部・准教授

研究者番号：２０７０８１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,700,000円

研究成果の概要（和文）：伊勢参宮ツーリズムの近代史の構築のための学際的アリーナを構築することを重要な目的として、以下の４班が共同しながら調査・研究をすすめてきた。＜信仰仰・民俗班＞ 檀家関係史料を中心に調査・検討を進めた。＜修学旅行班＞ 戦前の小学児童の伊勢神宮への修学旅行について検討するために旧国鉄門司鉄道局文書のデジタル化を進めた。＜交通・メディア班＞ 鉄道とメディアによって形成される大衆ツーリズムにおける伊勢神宮への参詣について検討した。＜地域社会班＞ 参詣者の受け入れの主体となった地域社会を明らかにするために旧御師関係史料の撮影と整理をすすめてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社寺参詣をめぐる研究は、民俗学・宗教史・近世史研究は「参詣者・地域社会」に、近代史研究は「交通・メディア」に注目してきた。また、修学旅行と伊勢参宮の相互関係について研究が不十分であった。これらの研究者たちが本科研で集い、学際的アリーナを形成したことは、上記のような研究の分断状況に一石を投じるとともに、「お伊勢まいり」という一般にも馴染み深いテーマゆえに研究成果の社会的還元の効果も大である。

研究成果の概要（英文）：The following four groups have been working together to conduct research and research with the important objective of creating an interdisciplinary arena for constructing a modern history of Ise Sangu tourism. <Religion/Folklore Group> have focused on historical materials related to the Danka(檀家). <School trip team> have proceeded with the digitization of documents from the former Moji Railway Bureau of National Railways in order to study prewar school trips for elementary school children to Ise Jingu Shrine. <Transportation/Media Group> have considered the visit to Ise Grand Shrine as part of the mass tourism created by railways and the media. <Local Community Group> have photographed and organized historical materials related to the former Oshi（御師） in order to clarify the local communities that accepted the pilgrims.

研究分野：日本近現代史、観光史

キーワード：参詣　観光　伊勢　信仰　ナショナリズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、「伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究 ―御師廃止から昭和戦前期まで―」（科研費基盤研究(C) 17K02146 代表平山昇 以下、「前科研」と記す）をふまえて、伊勢参宮ツーリズムの近代史を構築することを目指したものである。

いわゆる「お伊勢まいり」のイメージが近世と現代を直結させて近代史を欠落させたものであること、および、日本の観光旅行業形成史において社寺参詣「喜賓会→JTB」の文脈の影にかくれて看過されていること、という問題を克服して観光史・観光学を深化させたいという動機は前科研からのもので、本科研もその延長上にある。

そのうえで、本研究を新たに立ちあげる重要な契機となったのが、伊勢神宮と修学旅行の相互関係の実証研究に取り組む若手研究者との出会いであった。前科研がスタートした後、修学旅行の主な行先が戦前の「伊勢＋京都＋奈良」から戦後の「京都＋奈良」に移行した過程を明らかにした菅沼明正氏の論文「修学旅行とナショナリズム」(『KEIO SFCJOURNAL』17-1、2017 年)、および小学校の伊勢神宮への修学旅行の拡大過程を明らかにした橋本萌氏の論文「1930 年代東京市における小学校児童の参宮旅行の研究」（お茶の水女子大学大学院博士論文、2018 年。のちに単著『「伊勢参宮旅行」と「帝都」の子どもたち』〔六花出版、2020 年〕として刊行）が立て続けに出た。そこで両氏を招いて議論した結果、メンバーたちは伊勢参宮の近代史を明らかにするためには近代天皇制下の「教育・思想」をふまえて修学旅行を組み込むことが必須であるという認識を共有するに至った。さらに、菅沼氏はもともとの研究テーマであるナショナリズム（思想）だけでなく「交通・メディア」も組み込んだ研究内容であったことから、伊勢参宮ツーリズムを共通フィールドにした学際的アリーナの形成に不可欠な研究分担者として加わってもらうことにした。

２．研究の目的

前科研は、伊勢参宮の歴史について、大きく二つの問題を見出して出発した。

まず一つは、伊勢参宮の近代史の不在である。通説では、近世に全国各地からの参伊勢参宮の近代史の不在である。通説では、近世に全国各地からの参宮旅行のコーディネイターをつとめていた御師が明治初年に廃止されたことで伊勢参宮は衰退し（白幡洋三郎『旅行ノススメ』中公新書、1996 年)、その後大正中期から昭和戦時期にかけて鉄道の発達と「国家神道」を背景に伊勢参宮ツーリズムがブームを迎えたとされる（平山昇『初詣の社会史』東京大学出版会、2015 年)。だが、その間の時期（明治初年～大正前期）については十分に注目されてこなかった。

もう一つは、我が国の旅行業形成の歴史をめぐる通説が有する問題点である。明治期に欧米人旅行客向けの喜賓会が設立され、それを実質的に引き継いだジャパン・ツーリスト・ビューローが昭和期に邦人旅行事業を拡大させて日本交通公社（JTB）へと至る。これを日本の近代旅行業のルーツと見なすのが通説となっているが、これだけでは古くから日本人の旅の主要目的であった社寺参詣との関わりが見えてこない。

このような問題意識から、前科研では「旧御師（近世以来の地域社会)」と「鉄道（近代のマス・ツーリズム)」の両面から伊勢参宮ツーリズムの近代史の空白を解明しようと取り組んできた。前者については、伊勢の御師が明治の制度廃止後も昭和戦前期に至るまで各地

の檀家と関係を維持し続けたことを示す「岩井田家文書」の分析を集中的に進めた。後者については関連する鉄道の史料調査を行い、近鉄の前身である大阪電気軌道（大軌）と参宮急行電鉄（参急）の社内報を含む貴重な史料群を収集・分析することができた。

このように多くの成果を得た一方で、新たな課題が浮上してきた。まず第一は、参詣にかかわる多様な主体の解明が必要ということである。近代の伊勢参宮に関わる主体について、観光地理学の「ホスト―ゲスト」モデルに「交通・メディア」（ゲストとホストをつなぐもの）を組み込んでモデル化して考えてみると、旧御師以外の人々を含めた地域社会の多様な主体が伊勢参宮にかかわったことがみえてきた。また、旧御師との「旧誼」でつながり続ける旧檀家たちや、鉄道会社の新聞広告をみて行楽がてらにやってくる参宮客など、参詣者たちにも多様性があることが鉄道と旧御師の史料からみえてきた。近代の伊勢参宮ツーリズムの動向を総体的に明らかにするためには、これら「3 つの主体」の多様性をふまえなければならないと私たちは考えた。

第二は、これら多様な主体それぞれを規定した文脈は何であったのかという問題である。前科研では、参詣・巡礼をめぐる先行研究（山中弘編『宗教とツーリズム』世界思想社、2012 年など）と同様に「(A)信仰・民俗」と「(B)娯楽・観光」という観点から各主体の分析を進めたが、近代の伊勢参宮を考えるためにはもう一つ重要な文脈を組み込む必要がある。明治維新以降、皇祖神を祀る伊勢神宮（内宮）は格別な地位を与えられていたが、あくまでも「崇敬」が原則であり、国民各層の「参拝」が求められたわけではなかった。ところが、明治末期の大逆事件をきっかけとして、子供のうちから伊勢神宮に参拝させて皇室を敬う情操を養うべきという主張が台頭する。明治期に高等教育で始まった修学旅行が大正期以降に小学校へ裾野を拡大していった背景には、このような政治思想的な背景があった（平山昇「大正・昭和戦前期の伊勢神宮参拝の動向」高木博志編『近代天皇制と社会』思文閣出版、2018 年）。つまり、近代の伊勢参宮は「(C)教育・思想」もふまえて検討する必要がある。もちろん、伊勢神宮といえば「国家神道」の重要神社であるとこれまでも認識されてきたが、そのこととツーリズムを関連づけた研究は少ないうえに、地域社会に対する目配りが不十分であった（前掲平山『初詣の社会史』）。

以上を要するに、近代の伊勢参宮の総体的な解明には、上記の「3 つの主体」と「3 つの動機」をトータルに視野に入れたうえで実証研究を深めていく必要がある。本科研はこのような視角から伊勢参宮ツーリズムの近代史を解明することを目的としてきた。

３．研究の方法

もっとも「トータルに」といっても、一気呵成に、容易にできるものではない。本研究では、まずは伊勢参宮ツーリズムの近代史の構築のための学際的アリーナを構築することを重要な目的とした。

本研究に直接かかわる学問領域は歴史学・民俗学・宗教学など多岐にわたるが、自身の専門領域に閉じこもらずに関連する隣接諸領域と積極的に交流できるフットワークの軽さをもった研究者に集まってもらい、相互に連携しながら実証研究を進めてきた。共同研究を効率的に進めていくために、下記のようにメンバーを班分けして調査を分担した。各班の概要は以下の通りである。

＜信仰・民俗班＞ 近世以来の「御師―檀家」関係という「旧誼」にもとづいて地域共同体（主に農漁村部）の信仰・民俗の文脈で伊勢神宮を信仰した人々について検討した。

＜修学旅行班＞ 明治末期の大逆事件をきっかけに、昭和戦前期に至るまで拡大していった小学児童の伊勢神宮への修学旅行について検討した。
＜交通・メディア班＞ 鉄道とメディア（新聞・雑誌）によって形成される大衆ツーリズムにおける伊勢神宮への行楽を兼ねた参拝について検討した。
＜地域社会班＞ 参詣者の受け入れの主体となった地域社会（伊勢神宮・旧御師・門前商工業者など）について検討した。

上記の班分けは「収集する史料の性質と分布状況」という観点にもとづいておこなった。一口に伊勢参宮といっても、地域共同体の信仰・民俗にもとづく参宮者であればその地域の旧家や伊勢の旧御師家（岩井田家など）の文書、修学旅行生徒であれば学校・教育関係史料、都市部から交通・メディアの集客戦略によって行楽がてらに伊勢神宮に参拝する遊覧客であればメディア記事や鉄道の社内報、といったように、残された史料の性質と分布状況が大きく異なってくるからである。

各メンバーはそれぞれ所属する班において調査に従事しつつも、つねに前述の「3 つの主体」と「3 つの文脈」という全体像を常に意識しながら研究に取り組んだ。

４．研究成果

まず、史料の発掘という点で特筆すべき成果が２点ある。

まずは、前科研からすすめてきた「岩井田家資料」の整理・撮影・デジタル化がついに完了するに至った。膨大な点数にのぼるため地道な作業を長期間にわたって続ける必要があったが、これが完成するにいたったことだけでも本科研の大いなる成果であると言える。本資料をめぐっては、すでにメンバーたちによって伊勢参宮の具体的な諸相をめぐって新しい事実を明らかにする成果が種々出されているが、今後この資料を活用してさらに豊かな成果が生み出されることは間違いないであろう。

もう１点は、メンバーの菅沼明正が中心となって旧国鉄門司鉄道局資料を発掘し、こちらも整理・撮影・デジタル化が完了したということである。これまで存在をほとんど知られることのなかった本資料は、『局報』を中心として戦前から戦後にいたる門司鉄道局管内の鉄道運行の諸相を詳細に伝える超一級の史料であり、この史料群の発見と保存については地元九州のメディアでも大々的にほじられた。伊勢参宮ツーリズムはもちろんのこと、およそ鉄道がかかわる当時の日本社会のあらゆる領域の歴史的解明に資する本資料の可能性については、菅沼が中心となって鉄道史学会第４１回大会において共通論題パネル報告「鉄道史研究の可能性　―国鉄門司鉄道局資料をどう活用していくか―」がおこなわれ、参加した鉄道史研究たちから大きな反響を得た。

伊勢参宮にかぎらず社寺参詣をめぐる既存研究は、民俗学・宗教史・近世史研究は「参詣者・地域社会」に、近代史研究は「交通・メディア」に注目する傾向にあり、これら双方の視点をバランスよく組み込んだ立体的な歴史像の構築が課題として残されたままであった。また、修学旅行と伊勢参宮は相互に重要な影響を及ぼしあったにもかかわらず、そのような視角は近年になって教育史研究者からようやく示されるようになったばかりである。このように研究対象が近接・重複しながらも相互対話が十分でなかった歴史学・民俗学・宗教史・教育史の研究者が、本研究によって「伊勢参宮ツーリズムの近代史」という新たな研究領域を共通フィールドとして集い、学際的アリーナを形成できたことは、上記のような研究の分断状況に一石を投じることになったとともに、「お伊勢まいり」という一般にも馴染み深い

テーマゆえに、研究成果の社会的還元の効果も大である。

今後は、本科研で構築された学際的ネットワークを活かして、伊勢参宮ツーリズムをめぐるさらなる歴史の解明に邁進していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 平山昇	４．巻 (54)
２．論文標題 戦前期日本の「聖地」ツーリズム ―「聖地」の日本化に着目して―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 メディア史研究	６．最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 平山昇	４．巻 107(1)
２．論文標題 近現代日本における年中行事の日取りの変遷 ―改暦・軍隊・皇室・メディア・鉄道・経済・感染症・排日移民法etc...―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 史林	６．最初と最後の頁 173-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木勇一郎	４．巻 (103)
２．論文標題 鉄道開業一五〇年と鉄道展	５．発行年 2023年
３．雑誌名 交通史研究	６．最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅沼明正	４．巻 (876)
２．論文標題 書評 千住一・老川慶喜編著『帝国日本の観光 ： 政策・鉄道・外地』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 101-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 平山昇
2．発表標題 門司鉄道局と宗像神社
3．学会等名 鉄道史学会第41回大会共通論題「鉄道史研究の可能性－国鉄門司鉄道局資料をどう活用していくか－」
4．発表年 2023年

1．発表者名 菅沼明正
2．発表標題 戦前期における駅ポスターの研究
3．学会等名 鉄道史学会第41回大会共通論題「鉄道史研究の可能性－国鉄門司鉄道局資料をどう活用していくか－」
4．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

1．著者名 鈴木勇一郎	4．発行年 2023年
2．出版社 講談社	5．総ページ数 272
3．書名 国鉄史	

1．著者名 大谷栄一 ，吉永進一 ，近藤俊太郎	4．発行年 2023年
2．出版社 法藏館	5．総ページ数 352
3．書名 増補改訂 近代仏教スタディーズ 仏教からみたもうひとつの近代	

１．著者名 高木博志	４．発行年 2023年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 688
３．書名 近代京都と文化	

１．著者名 森覚 ，大澤絢子	４．発行年 2024年
２．出版社 法藏館	５．総ページ数 400
３．書名 読んで観て聴く 近代日本の仏教文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菅沼　明正 (SUGANUMA Akimasa) (00868672)	九州産業大学・地域共創学部・講師 (37102)	
研究分担者	谷口　裕信 (TANIGUCHI Hironobu) (10440835)	皇學館大学・文学部・准教授 (34101)	
研究分担者	笠井　賢紀 (KASAI Yoshinori) (80572031)	慶應義塾大学・法学部（三田）・准教授 (32612)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	市田　雅崇 (ICHIDA Masataka) (80910439)	立教大学・文学部・特任准教授 (32686)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	櫻井　治男 (SAKURAI Haruo)		
研究協力者	濱千代　早由美 (HAMACHIYO Sayumi)		
研究協力者	鈴木　勇一郎 (SUZUKI Yuichiro)		
研究協力者	市田　雅崇 (ICHIDA Masataka)		
研究協力者	田口　祐子 (TAGUCHI Yuko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関